

都市計画及び建築とバリアフリー

誰もが住みやすい社会をめざして

田中 清之

バリアフリーとは、「障壁」とフリー（開放する）を組み合わせる言葉で、もともと建築等の物理的障壁をなくすることを意味していました。しかし、バリアフリーの言葉が浸透するにつれ、物理的障壁だけでなくハードの面から、制度・意識・情報のバリアといったソフト面に広く波及していきましました。そこでバリアフリー（同じ意味を持つユニバーサルデザイン）の問題点を課題を提起します。

都市計画とバリアフリー

一九五五年障がい者白書は、バリアフリーについて①物理的バリア②制度的バリア③意識的バリア④情報的バリアを掲げています。一方ユニバーサルデザインとは、すべての人が利用可能で有用な製品・建物・空間・環境などをデザインすることをいいます。欧米では障がいと切り離せないのに対して、ユニバーサルデザインは障がいと言及しないところに違いがあります。日本では情報公開と市民の権利が近年の歴史の中で確立されており、障がい者が街なかに出かけることはごく自然行為です。日本では明治以降障がい者の隔離政策がとられたため、障がい者が街なかに出かけることは稀で、当然社会環境も障がい者に対する配慮が欠けておりました。公共交通の現場でトラブルに何回も遭遇しました。

建築計画とバリアフリー

バリアフリー新法の中で「特定建築物等の基準適合義務」があり、中規模以上の建築物に適用されています。更に都道府県レベルでも福祉条例が整備され、法律とほぼ同様の基準が規定されています。バリアフリー新法の中でバリアフリー基準に適合されるべき施設は、①出入口・廊下等 ②階段 ③傾斜路 ④昇降機 ⑤便所、⑥客室 ⑦敷内通路 ⑧駐車場 ⑨浴槽等と規定されています。個々の基準は省略しますが、幅と広さの確保、段差の解消、緩やかなす法や配必要設備（手すり等）の確保など、移動しやすく使いやすい基準を定めています。法律が整備され管理者の整備義務が明確になり、公共交通機関や公共交通駅舎や停留所などが多くは改善されましたが、都市部に限定されているようです。また外出しにくい住みやすくなつたような気はしますが、まだまだ不十分です。その原因の一つに、法律の整備基準が一定の特定建築物以上に限定されたことと設計者サイドに求めることとあります。つまり新築の建築物は一定規模以上無い限り適用されないで、この規模以下の建築物が未整備で終わつてしまっているのが多いです。一部の小規模建築物でもバリアフリーに配慮した設備をみる機会もあります。が、管理者の意識に掛かっているといえます。一方で設計者サイドにも多くの問題があり、基準をクリアすればよいと設備を設計し、視認しにくい表示をすることもあり、使用者側に向けた設計をみることも少ないと感じました。行政側で一定以上の法整備をした上で、設計者サイドが自覚を研鑽しよりよい建築物を世に送り出す責務があると考えています。今後は国民自ら視察する者への配慮点に注目が設計に反映できるようになり、一般国民から設計に反映できるような意見が出てくることを期待しています。



海外からの便利 多彩な魅力をもつ カナダの都市トロント

喜田 祥子

スパンシアで約七年間まちづくり支援業務に従事した後、カナダより急断の海外留学を計るため昨年六月に退社。現在は、カナダにて生活を送る。トロントは人口、経済、観光のどれをとってもカナダ随一の大都市である。また、人種のモザイクと呼ばれるほどの多文化社会を形成し、五大湖のセントカタリヤ湖をはじめとした豊富な自然に恵まれた街である。トロントに渡って約五ヶ月余り、見て体験したこの魅力的な街を（ご紹介）して頂く。

モザイク都市トロント

私がトロントに来たとき驚いたことは、街なかや地下鉄の駅などでは日常的に英語以外の言語が聞こえてくる。トロントの人口は約百万人以上で約半数は移民で構成され、九十以上の民族が居住し約八十の異なる言語が話されている。移民は、中国をはじめ、イタリア系、ドイツ系、オランダ系、ポルトガル系など多数に上り、チャイナタウン、イタリア人街、ギリシャ人街、インド人街、コリアンタウンなど多様なコミュニティが混在して街が構成されている。そのため食文化も多様で、異なる国の人々とお会い、様々な食べ物や食事を食べることもトロントの魅力のひとつだと思う。

暖かいイベント

夏の時期、多種多様なイベントがダウンタウンのど真ん中で開催される。これには理由がある。トロントでは例年十一月ごろから雪が降り始め、最低気温の体感温度はマイナス三度程度になると言われる。暖かくなるのは六月を過ぎた頃からと半年以上を冬と過ごさため、短い夏をいかに楽しむか重要なのである。夏期は日長時間がとて遅く夜九時頃まで明るい。仕事や学校終わりに十分余暇を楽しむことが、オンタリオ湖畔にはビーチもあるのビーチで

オントリオ湖の景観

「オンタリオ」とは、カナダ先住民のイロイロ族の言葉で、美しい水に由来する。トロントの都心に位置するオンタリオ湖は四四四回、南北八十五哩、東西三哩、南北北八十五哩、湖畔に立って「海」と感じるほど広大でどこまでも続く地平線が眺められる。有名な観光地「ナイアガラの滝」は、オンタリオ湖南部と繋がるナイアガラ川にあり、トロントから車で約一時間の距離にある。トロントから車で約一時間、オンタリオ湖に接しており、ハーバーフロントは市民の憩いの場であり観光スポットでもある。トロントの象徴「CNタワー」と鉄道のメイン駅である「ユニオン駅」、MLBトロント「ブルージェイズの本拠地」ロジャースセンター」などトロントの名所をこのハーバーフロントに集める。また、ハー

バスはいつでも乗れる

ハーバーフロントからフェリーに乗船して数分でアクセスできる場所には「トロントアイランド」と呼ばれる公園として整備された孤島があり、夏場はハーバーフロントとあわせて市民の憩いの場所として賑わう。

バスはいつでも乗れる

バスの中で、レストランで、道端で出会うトロント市民は皆とにかく親切でやさしく、公共施設のドアを開ける時、後ろの人が少しの間ドアを開けておくってくれる。バスが降りるときは運転手に「Thank you」と声を掛ける。どんなに混雑した地下鉄やバスの中でも、スピーカーをよく見かけると、困っていたれば誰かが手助けをする。驚くことに、地下鉄やバスにはペットの犬も乗車でき、ホームも大型犬が電車を待つ姿を見るのも珍しくないことである。一度も犬が吠える声を聞いたことがないものオーナーが吠えだされる証拠だと思ふ。前述したように多民族が暮らしているため、日本人の私が街なかを歩いていると周りから浮くこともなく、人種による偏見も全く感じない。各人が人々にやさしい行動をとっていると感じるトロント、私もこうして毎日々楽しく暮らしていることに感謝したい。



▲CNタワーから望むトロントの街
▼ハーバーフロントとCNタワー

歴史資産の継承と開放

プラハにおけるまちづくり

井澤 知且

首都プラハは、八世紀に最初の居住地が形成され、兩千年以上の歴史を有し存在を示しています。十一世紀初頭には神聖ローマ帝国の中心として、ヨーロッパ最大の規模を持つ朝来、十五世紀からハプスブルク家が統治しました。その後、帝国解体、社会主義、変革失敗と実現など、紆余曲折を経て今日の姿があります。米村盛義が語った街その歴史資産をどのように継承し、開放しているのかを考察します。

はじめに

中央ヨーロッパに行く機会を得ました。ブダペスト、ウィーン、プラハ等の歴史に名前を留める都市訪問です。これら三都市はハプスブルク家が支配し、栄華を誇つた都市群です。紙面に制限があるので、ここではチェコ共和国の首都プラハについて述べます。

時代の層が重なる市街地

プラハの中心街は第二次世界大戦で大きな被害（もちろん無傷だったわけではない）にも、また、その後の資本主義の高度経済成長に伴う市街地の再開発等も巻き込まれなかったこと、ロマネスク様式の大聖堂、ゴシック様式の修道院、バロック様式の教会、ルネサンス様式の美しい庭園と、すなわちロマネスク建築から近代建築までの多様な建築様式が並ぶ「ヨーロッパの建築物の街」（プラハ市のネット紹介）になり、ユネスコの世界遺産にも登録されています。つまり、時代の層が積み重なる市街地を形成し、その市街地そのものが大きな観光資源になっています。

旧市街地全体が世界遺産

プラハも他の欧州市の例に漏れず、戦後、自動車も普及し、市街地が溢れ溢れ、その解決に向けて、古い建物を壊してセトバックしたうえで新しい建築物を建てる計画を立てたが、途中で断念したとされます。膨大なエネルギーと時間を消費するを得ず、またプラハの個性がなくなること断念した要因でしよう。その断念がのちから、今日、世界遺産として取り上げられたわけです。

おわりに

名古屋も都市の道路比率が高くなり、閑静なまちづくりには、バリアフリーも出てくるのではないのでしょうか。改めて、公共空間はだれのもの、さらには、公共空間の高い都市の建物もだれのもの、が問われています。また、誰い意志もコントロールなしでは歴史の資産は守れない、という教訓を得たような気がしています。

旧市街地の様子

市街地の中心には旧市街地があり、そこから四方八達の道が広がっています。市街地はヴァルダフ川の洪水に備えるため二〜三mの底上げをしました。これはウィーンのドナウ川対策と同様です。地震や台風はありませんが、国境のない川は上流から下流へ流れ、時として大洪水を起します。既存の建物は石造りであるので、地震をかきあげても倒れることはありません。従来の一階が地下階になります。

おわりに

名古屋も都市の道路比率が高くなり、閑静なまちづくりには、バリアフリーも出てくるのではないのでしょうか。改めて、公共空間はだれのもの、さらには、公共空間の高い都市の建物もだれのもの、が問われています。また、誰い意志もコントロールなしでは歴史の資産は守れない、という教訓を得たような気がしています。



ワーツラフ通りと一体のバサージュ



旧市街広場。観光客や市民で賑わう



近代のダンシングビルと市街地の調和？



時代の顔ワーツラフ通りの賑わい